

原子炉実験所だより

= 故 木村毅一先生追悼記念特集号 =

目 次

1. 初代所長木村毅一先生を偲ぶ
原子炉実験所長 西原英晃 1
2. 木村毅一先生を憶う
大阪大学名誉教授・名古屋大学名誉教授 伏見康治 2
3. 故木村毅一先生を偲ぶ
京都大学名誉教授 丹羽義次 3
4. 木村毅一先生の逝去を悼む
京都大学名誉教授 清水 榮 5
5. 故木村先生への追悼と京大炉共同利用
原子炉利用研究者グループ代表幹事
京都大学工学部教授 木村逸郎 6
6. 二冊のノート
京都大学化学研究所教授 井上 信 8
7. 木村毅一先生の思い出 - 原子炉建設本部の頃
京都大学原子エネルギー研究所教授 高橋幹二 10
8. 木村毅一先生のご遺徳を偲ぶ
京都大学名誉教授 桂山幸典 11
9. 木村毅一先生との出会い
京都大学名誉教授 筒井天尊 13
10. 木村毅一先生の思い出
京都大学名誉教授 岩田志郎 15
11. 木村先生を悼む
京都大学名誉教授 東村武信 17
12. 木村先生を偲ぶ
原子炉実験所教授 岡野事行 18
- 編集後記
原子炉実験所教授 渋谷 巖 20

No.18 '92. 12 京都大学原子炉実験所

初代所長木村毅一先生を偲ぶ

原子炉実験所長 西原 英晃

原子炉実験所に入ると正面左手に

「凡てのことは今ここに

こめられてあり

今ここはおのずからある」

の石碑があります。これは木村先生が昭和39年6月、KURの臨界到達を記念されて、建設委員長であった藤本武助先生とともに建てられたものであります。

碑文の由来については、木村先生が「アトムの一ひとりごと」に詳しく説明されておりますように、原典は仏教の教典のようですが、書かれたときの先生の御気持ちは、開所までの難関に「悲憤の涙にくれたさまざまな思い出を一切この碑に刻みこめ、すべてを忘れようとした」ことにあった、ということです。原子炉実験所は、木村先生を頂点とし、実に多くの方々の長年の努力の結晶としてこの熊取の地に誕生したことを後世に伝えるために、遺されたものであります。

現在、原子炉実験所は、開所以来の難局に直面しております。私達現所員は、この難関を切り抜ける決意を固めています。今、改めてこの碑文を読むとき、いろいろな想いが浮んで参ります。「凡てのことは今ここに……」の「ここ」とは中性子を学問のために供給する研究炉と理解することもできます。中性子は宇宙創造の源であり、「凡てのことは」は大学研究炉が役立つべき多くの研究分野です。そしてそれは、「おのずからある」ものであります。いま、原子炉実験所の見直しの中にあって、実験所が「おのずからある」のか、

すなわち自立しているのか、という酷しい議論があります。「凡てのことは」にかまけていて、「おのずから」を忘れるようでは木村先生の御遺志に添うものではありません。原子炉実験所の将来のことを思うとき、いつもこの碑の前に立ち、御教訓を心に刻み付けています。

「陽光院天功亮毅居士」が先生の諡^{おくりな}であるとうかがっております。「陽光」はradiationでしょうか。中性子のみならず原子炉実験所を貫く軸の一つである粒子線科学を表わしているものと拝察します。「天功亮」は、蹴上のサイクロトロン^{サイクロトロン}の建物にあった銘板の文字、帝舜の政治理念「亮天功(天のわざをたすく)」に由来するものですが、先生は前掲書の中で天によって造られた「物」を保持し、よりよい姿に育てることが政治の大本であり、政治家の責務であると宣言したのが舜であった。彼の下に賢臣群をなし、それぞれ政治をたすけたので、天下は泰平であり、万民は安じて生業にはげみ楽しんだ。……

一方、自然科学者が「真理」を探求することは造物主の意志を知ることであり、その研究成果を人類の福祉に用いることは「亮天功」の精神に添うものであるといえよう。と説明されています。「真理」に向う真摯な心と、「天下万民」に対する謙虚な心を新たにし、原子炉実験所で学問を発展させることをここにお誓い致します。

合掌

木村毅一先生を憶う

伏見 康治

木村先生の御逝去を心からお悼み申し上げます。

木村先生は、京都大学の荒勝文策先生の下で原子核物理学を専攻されましたが、私は大阪大学の菊地正士先生の下で同じ原子核物理学関係の仕事をしていた同業者であり、同時代人でした。しかし昔は大学間の壁は予想外に厚く、特に親しくして頂いたわけではありませんでした。

ところが、1956年（昭和31年）末京大に原子炉を作る予算が計上され、この炉は、関西地方の、諸大学の共同利用に供するという話が起りましてから、急に具体的な連絡が、京大と阪大の間に行われるようになり、それからの5年間木村先生との接触は急に深くなって行ったのであります。この5年間というのは、原子炉の敷地を求めて、各地で反対運動に会いながら、最後に熊取に落ち着くまでの、苦渋に満ちた5年間を指すのですが、これが学問上の交流ではなくて、反対運動をいかに回避するかという、全く政治的な交渉の中で、お互いに残念なことでありました。

1974年11月京大原子炉実験所記念講演記録（KUR News 48号、後に木村先生の文集「アトムの一とりごと」に輯録）によりますと、この間の先生の御苦心が如実に描かれております。宇治から始めて、阿武山、交野、四条畷、と転々として最後に熊取に落ち着くまでの、科学者としては全くの場違いの苦労が描かれております。そのクライマックスは、四条畷を候補地として、近くの小学校の講堂で、講演会を催したときでありました。実はその一週間程に、大阪府の催した京阪大の両

総長と中曽根さんの演説会があり、それはまず無事に済んで、府は安心して、次の計画として、木村先生と私伏見との学術講演会を催したのですが、その間にしりぞかれた反対派（反町長派と言うべきか）は、体制を整えて町長宅に押し寄せたりしていたのでした。とにかく始めから騒々しかった会場は木村先生のお話しの最中に益々喧噪を極めるようになり、お話しは全くきこえなくなりましたし、私が交代したときは全く手のつけようのない状態になりました。遂に府の役員の方々が、これでは傷害事件に発展するかも知れないと心配して、講演会を閉じることとし、木村先生と私とを裏口から車に乗せて、脱出させたのでした。全く這々の態での逃亡劇でした。

木村先生は全くの学者でしたから、こういう政治的局面に置くのは誠にお気の毒でした。

私には多少図々しいところがあって、こういう局面に出遇ってもそれほど堪えられないことにはならなかったのです。それに原子炉建設について木村先生は始めそんなに御熱心ではなく、むしろ工学部の先生方のおつき合いで準備委員会に臨まれたのではなかったかとも思います。先生はもう大きなサイクロロンをお作りになっており、それを使ってやるべき核実験の計画を沢山お持ちになっていたのしょうから、それ程原子炉に執着しておられなかったのではないのでしょうか。とすれば私は全く木村先生に悪い仕事を押し付けたことになります。今ふり返ってみて、そんな不安にかられます。

しかしともあれ、5ヶ年の放浪の末に、原子炉の立地がきまり、さらに3年の後に原子

炉は完成したのであります。この後半のお仕事は、サイクロトロン建設同様先生の腕を存分に振える領域であったと思いますので、その完成は、先生の御満足の結果であったと思いますし、「今ここにある」の名句も先生

の満足感を現したものと信じます。私は残念ながら名古屋大学のプラズマ研究所の設立に仕事を移りましたので、この先生の得意の場では御一緒でありませんでした。

先生の御冥福をお祈りいたします。

(大阪大学名誉教授・名古屋大学名誉教授
元参議院議員)

故 木 村 毅 一 先 生 を 偲 ぶ

丹 羽 義 次

私の知る故木村毅一先生の御偉業は、京都大学として未曾有の難事業であった原子炉実験所の創設そのものでありますので、ここにその創設の経緯を述べ、先生の御偉徳を偲びたいと思います。文中私事にわたるところが多々ありますが、お許しをお願い致します。

私は昭和26年1月に図らずも工学研究所に勤務することになりました。しかし、それから間もなく、政府諸機関の見直し（行政監査）が行われ、その結果、当時我が国では黎明期にあって政府も最重点項目の一つとしていた“原子力の平和利用”を目的とする研究所への転換が強いられました。このあたりの詳しい事情は助教授の私には判りませんでした。昭和30年には工学研究所から研究用原子炉設置計画案が文部省に提出されました。そこで同省は、科学技術庁、原子力委員会、学術会議関係者と協議を重ね、同31年11月に京都大学に原子炉設置準備委員会を置き、原子炉の型式、設置場所、管理運営の方法等について検討・立案することにしました。木村先生はこのとき同委員として、初めてこの計画に参画されたのではないかと思います。

この準備委員会は昭和32年1月に設置場所を宇治に選定しましたが、下流市町村の猛

烈な反対に合い、もともと結合力のない同委員会の結束は乱れ、8月にはこの案を放棄しました。このつまづきに同委員会は甚大なショックを受け、その立て直しを余儀なくされました。このとき、一部の同委員から私に極めて強い半強制的な協力要請がありました。それで、この計画に全く無縁であった私は、ここまで計画を押し進めた京都大学の立場を熟慮し、私には欲望の塊であるように見えた既成の組織集団の中に、断腸の思いで無欲で身を挺する決心をしました。このようにして、私は32年8月に宇治案放棄で挫折感が充満し、完全に無力化した立地調査分科会に籍を置くことになり、初めて木村先生との繋がりを持つようになりました。

宇治に続く阿武山候補地放棄後は、大阪府の原子力平和利用協議会の助力を得ましたが、交野、四条畷、美原の各町、等々いずれも思わしい成果がえられませんでした。

そこで、大阪府は35年4月に、これまで設置に反対してきた組織の代表も加えた大学研究用原子炉設置協議会を発足させ、候補地の選定を一任しました。私は3名の大学側委員の一人として参加しましたが、考え方の異なる多様な人々や地域住民との対話は筆舌に

尽しがたい激烈なものでありました。しかし、幸いにも誠意を尽しての激論はやがて収斂の方向に向いました。この間、常に第3代設置準備委員会委員長を務めておられた木村先生の御指導を頂戴しましたが、先生の助言は恬淡で“学問への情熱と人間愛”に溢れるものでした。

このようにして、昭和35年12月に現在の地に敷地が決定しました。

一方、昭和33年9月には敷地の目途が立たないまま原子炉建設委員会が設置され、建設に必要な諸準備が進められました。そして、同37年3月には立地の諸条件が整い原子炉設置承認がえられましたので、翌月いよいよ実務的な作業を遂行するための建設本部が設置され、木村先生が本部長を、私が副本部長を務めることとなり、先生との直接の結びつきを持ち、困難が山積する未知の大事業を推進することになりました。このことは、先生の高邁な人格と、私の“人間愛とやすらぎの心”が自然に結合して行った結果であったと思います。

その後、同36年12月にめでたく起工式を挙行し、36～38年度予算で所期の原子炉を始めとする諸施設・設備が完成しましたが、38年4月には正式に京都大学附置の原子炉実験所が誕生し、先生は初代所長に就任されることになりました。私は38年度予算執行を残していましたが、建設は完全に軌道に乗っていましたので、この機会に、6年間の大任を終えて木村先生のもとを辞し、工学部に転勤することにしました。

この予算執行権を持った施設部とは別個の建設本部を組織すること、業務を円滑に推進することには少なからぬ困難と苦労がありました。しかし、先生は私を信頼され、基本的問題以外は總て私の進言通りに御決裁頂いたことは、先生の抱擁力のある豪胆なお人柄の表われであります。私は先生の信頼を身に余る光栄に思っています。

ここに、我が国の原子核物理の発展に献身され、輝かしい数々の偉業を残された先生の御遺徳を偲び、御冥福を衷心よりお祈り申し上げる次第であります。

(京都大学名誉教授・元建設本部副本部長)

木村毅一先生の逝去を悼む

清水 榮

木村毅一先生は軽い肺気腫の持病にも不拘、悠々自適されていたが、去る7月8日午前、88歳で逝去された。日本アイソトープ協会（当時、放射性同位元素協会）が社団法人として発足した昭和29年5月より47年5月まで理事として、その後は顧問として今日に至った。今先生を失い、協会の発展を共にした今は亡き諸先生のことを脳裡を過り、止める術なき人の世の儚さが身に沁みる。私には京大入学以来55年の間始終近くにおられた先生の死は淋しさと悲嘆の極みである。

先生は明治37年奈良県境に近い京都府下の村に生をうけ、郡山中学を経て、第三高等学校、京大物理科に進まれ、ここで朝永振一郎、湯川秀樹両先生と机を並べて、生涯変ることない友情を結ばれた。理論、実験と後の進路は異ったが、共に新興物理学や原子力の発展に偉大な足跡を残されたことは周知のことである。今や三先生共になし。

木村先生は京大卒業の後、昭和5年新設日も浅い台北帝国大学の荒勝文策先生の許に助手として赴任された。当時荒勝先生は欧州各地の碩学の許で最新物理の実験と理論とを研鑽し、帰朝した頃で、雄心勃勃たるものがあり、直に木村先生、植村吉明氏（後に京大化研教授）を督励してコッククロフトーウォルトンの実験の追試を開始して加速装置を製作し、彼等に遅れること2年にして昭和9年7月に加速陽子によるLi核の人工破壊に成功した。これが本邦に於ける原子核人工破壊の嚆矢である。荒勝先生が昭和11年8月京大教授に転任されると共に木村先生も京大に戻られて、核物理実験を続行された。15年には

RaCの γ 線による重陽子の光核崩壊の実験により、中性子の正確な質量を測定するという輝かしい業績をあげられた。昭和14年末Uの核分裂が発見されるや、京大でも熱中性子によるUの核分裂の研究のうち、先ず発生する分裂中性子数 $\nu=2.6$ を決定する有名な実験を行い、15年9月には萩原篤太郎氏の名前で発表されたが、この実験は木村先生と植村氏の直接の指導の許でなされた。戦時中は熱中性子によるUの各種核反応の断面積の測定を行う一方、物資窮乏の戦時中、磁極径90cmのサイクロトロン建設に苦勞された。これは未完成のまま終戦後占領軍によって破壊撤去された。

終戦の8月6日の広島原爆に際しては第一次の荒勝教授調査班の一員として3日後に現地に至り、広島全域に残っていた各種物質中の誘導放射能の測定により、原爆である放射能学確証を得た。その後9月になり京大あげて救援災害調査に行くこととなり、木村先生は医学部の人々と現地に再び赴いた。9月17日の夜襲った強烈な枕崎台風による山津波により宿舎が土石流で崩壊し、海岸まで押し出され、京大調査班員のうち11名の遭難殉職者を出す悲惨事が勃発した。木村先生もこの折海中まで押し流されたが、九死に一生を得た。先生にとってこれが人生の一大転機となり、後の生は拾いものであると、余生は自己を放棄して全身をあげて世の為に捧げるという覚悟を持つに至って、これより多くの困難な事業に進んで当られた。先生を長として京大サイクロトロンの再建を昭和26年頃より開始され、これは30年11月に一応完成した。こ

の頃京大内で研究用原子炉を設置したいとの強い要望が興り、31年1月にこの建設が決ったが、この建設敷地をめぐり、数年間に亘って複雑且つ不可解な騒動が起った。木村先生はこの難関の衝に当り、驚く可き忍耐力で、恥辱にも等しい交渉折衝の苦難を克服して、38年になり研究用原子炉が全国共同利用施設として完成した。木村先生は初代の原子炉実験所長として定年退官まで奉仕されて、全国研究者の便を計る体制を確立された。この間大阪府立放射線中央研究所の設立も懇請され、昭和36年11月より初代所長（非常勤）として11年勤められた。37年にはこの内にアイソトープ協会の関西支部を開設され、42年6月大阪

事務所が大阪市内に開設される迄協会の関西方面の仕事を取扱った。

先生は43年3月京大を定年退官された後も、福井工業高等専門学校第二代の校長として活躍され、新しい工業技術者教育の発展に力を致した。

先生は、このように生涯を通して円満な人格と稀にみる精神的忍耐力で、よく我国の原子力の発展に貢献されると共に数多くの偉材を育成して斯界の進展に寄与された。後進と共に先生の人徳と輝しい生涯を偲び、新時代に対処すべき覚悟を新たにして、先生の御冥福を祈る。

（京都大学名誉教授・元化学研究所教授）

故木村毅一先生への追悼と京大炉共同利用

木村 逸郎

このたび、京都大学原子炉実験所初代所長・京都大学名誉教授木村毅一先生の御逝去の報に接し、原子炉利用研究者グループを代表して、心より、哀悼の意を表したいと思います。

木村先生は、昭和34年から原子炉設置準備委員長として、当時難航を極めた敷地問題の解決に尽力され、また原子炉建設本部長として、原子炉を中心とした原子炉実験所の創設を担当された同実験所の父ともいえる存在でした。さらに、創設成った原子炉実験所の初代所長として、京大研究炉（KUR）とその付帯設備を完成され、引続きそれらを全国大学共同利用に開放され、その体制づくりと研究の推進を図られた点で、原子力平和利用とくに原子炉共同利用の母でもありました。

私自身、昭和36年の夏から若い助手として、

原子炉建設本部に参加させて頂きましたが、最高責任者の先生と直接お話する機会などほとんどありませんでした。しかしそれでも、活気に溢れた建設本部の会議で、地元との交渉の状況を御報告になっておられた先生を思い出します。ようやく御苦勞が報われ、同年1月原子炉設置のおぼえがきに調印され、記者会見をされていたお姿や同年12月の起工式で鋳入れをされた先生のモーニング姿もはっきりと覚えています。先生もよく書いておられましたように、あの大事業が成功したのは、よき副本部長の丹羽義次先生（現京都大学名誉教授）を始め、先生が7人の武士（さむらい）と呼んでおられた立派な先生方の一致団結があったことによるところが大きいと思いますが、やはり最高責任者として、

いつも穏やかな中に厳しい指揮をとられた先生のお力によるものと信じます。原爆被害調査に赴かれたさい、広島郊外大野浦での山津波で、一度は死線を越えられた先生は、普通の人にはない不死鳥のような不屈の魂を持っておられました。

昭和39年6月25日、初めてKURが臨界に到達した夕べ、ホットラボ棟玄関から南東方向にある雨山の空に綺麗な虹がかかっていたことも、それらを見られた先生がとても喜んでおられたお姿とともに臉に残っております。それから少しして、原子炉実験所では時の文部大臣をお迎えして、開所式が挙行されましたが、そのさい配布された美しいパンフレット冒頭の挨拶の中で、先生は「元来、共同利用の研究機関は、大規模の実験設備を集中的に整備し、研究者の衆知を集めて研究計画、研究課題を確立し、それを強力におし進めることによって大きい成果を挙げることを主眼とするものであります。したがって、所内、所外を問わず、研究者の各々は共同の真義を認識し、自我をおさえて奉仕の精神に徹しなければなりません。このことはまことにむづかしい問題であります。この実験所を研究の場と考えると同時に、人間形成の道場とも考え、物心両面の調和した啓発を志すよう努力すべきだと思います。かくあってこそ、国家社会の期待に応え、進んでは人類の平和と幸福に寄与できるものと考えます。」と書いておられます。特に「実験所を人間形成の道場とも考えよ。」とのお言葉は、所員の会議でも時々耳にし、私もそうありたいと思ったものでした。

昭和39年下半期39件でスタートした共同利用研究は、その後も順調に発展し、現在までに延3687件に達しております。昭和49年から始まった京大臨界集合体(KUCA)共同利

用284件を加えますと、3971件と4000件に近づきました。発足当時から言われてきた医・理・工・農学関係はもちろん、より広い分野の研究者が全国から原子炉実験所へ集まって、実験研究を行い、数多くの成果を挙げています。これまでに出版された論文やレポート類は5500件を越え、世界の学界に寄与するところが少なくありません。共同利用研究に参加した人の数は手もとになくて、あまりはつきりしませんが、万の桁にあると考えられます。原子炉実験所の共同利用者は、中国の諺にある井戸の水を飲む人のように、その井戸を掘った人々のことを決して忘れてはならないと思います。それには、今は亡き木村先生を偲び、その御遺徳を讃えることが大切ですが、もっと大切なことは立派な研究成果を出すことだと思います。先生は半分冗談のように、本当は真面目に、「この原子炉を使った研究でノーベル賞をとり、ぼくの墓に供えて呉れよ。」とおっしゃっておられました。我々共同利用者一同、原子炉実験所の所員の方々とともに大いに頑張らなければならないと思います。原子炉実験所が厳しい局面を迎え、それを克服して輝かしい未来への再生を図ろうとしている現在、このことはとくに大切です。それにもう一つ、さきに少し長々と引用しました木村先生のお言葉にある「人間形成の道場」としての原子炉実験所について、じっくりと再考してゆくことも意義深いのではないのでしょうか。

共同利用者一同、故木村毅一先生に深く感謝し、その御冥福をお祈り申し上げます。そして残された者が力を合わせて原子炉実験所の新しい出発に協力してゆきたいものと考えております。

(原子炉利用研究者グループ代表幹事・

京都大学工学部教授)

二 冊 の ノ ー ト

井 上 信

2冊の変色した木村毅一先生の古いノートが化学研究所の旧木村研究室の遺品として残っている。1冊の表紙には京大サイクロトロンを生立と書かれている。もう1冊の表紙にはサイクロトロン復旧計画とあり、その一番上に「亮天功」の文字が書かれている。

1冊目のものは戦前のサイクロトロンの建設ノートで、おそらく完成してから整理して書こうとされたのであろう、前半はタイトルだけがいくつか書かれているだけである。後半は日誌的な記述が昭和19年から20年にかけてなされている。これも時々まとめて書かれているようで、極めて簡単ではあるが、それでも日本各地が空襲にあう中でサイクロトロンの建設に励んでいる研究室の様子が伝わってくる。マグネットが完成し、昭和20年の正月にはこれにシメ飾りをして祝うところまできたが、その後物資不足で完成に至らず敗戦を迎える。広島原爆投下直後に調査に出かけ、また敗戦9月に3度目の広島調査に出かけた時に大野浦の陸軍病院で枕崎台風に見舞われ、多数の犠牲者を出すなどしながら、11月には発電機の据え付けを始めた。このような苦勞をして昭和17年から30万円の費用を費やして完成に近づいたサイクロトロンは、昭和20年12月15日米軍により破壊撤去された。研究室の人々の胸中は何の様なものであったのか、ノートには11月の中旬までの記録しかない。

占領軍の命令で、戦後数年原子核の研究が禁止された間も、昭和9年7月25日午後11時荒勝文策先生、植村吉明先生とともに日本（台北）で初めて原子核の人工変換に成功し、

アルファ線による硫化亜鉛の閃光を「あたかも星、天より降ってこの成功を祝福するかに感じた」その感激を忘れることはなかったであろう。研究再開が認められると退官されていた荒勝先生にかわり、木村先生が中心になってサイクロトロンを再建された。

2冊目のノートには昭和26年から28年までの様子がかかなり詳しく書かれている。蹴上の建物の入口にある亮天功の石額に木村先生だけでなく、当時の政財界の人たちもずいぶん感激した様子がうかがえる。大学における再建サイクロトロンの第1号は大阪大学と決まり京都には予算が付かなかったときの落胆、懸命の陳情で一転国庫補助が認められたことなどが細かく書かれている。この時、国の金だけではとうてい完成できないので民間の寄付を仰ぐことになり、昭和27年の後半から服部峻治郎学長を理事長とする原子核科学研究協会なるものを作り、寄付金集めを始める。これは大変な事業であったと思われる。実際のサイクロトロンの完成は、昭和30年になるが、木村先生のノートは、昭和28年の1月で終わっているのはそのためであろうか。あとはいくつかの寄付集めのための書類が残されている。

寄付は実はこの協会のできる前の昭和26年9月宮津町の青年団体から寄せられたのが第1号のようである。戦後の苦しい時に寄付を呼びかける方も大したものだが、呼びかけられた方もまたよくこれに応えたものと感心する。サイクロトロン本体の建設費6千万円のうち2千万円が寄付金であった。今、民間資金の導入などということがいわれるが、バ

ブル酔いと当時の精神との落差を感じる。

私が3回生になって物理学科に所属したころは木村先生は原子炉の敷地問題で苦勞され「四条畷の戦い」に疲れきっておられた頃である。それでも先生は折りにふれ硫化亜鉛の閃光の話や亮天功の話を感慨をこめてされていた。戦後の農地改革で不在地主は土地を失ったが自分は學問がしたかったから農地は弟に譲っていたので幸いしたという、無欲な先生にとっては、自然の眞理を極める営みこそがなによりも大切であったのであろう。原子力という政治の流れに身を置いてみて、原子炉にはこんなに金が出るのに、サイクロトロン建設の頃には予算不足であんな苦勞をしなければならなかったことに、なんとなく割りきれないものを感じておられたように思われる。このことは先生の「アトムのひとりごと」の

なかにも見える。

原子炉は政治的には進めるかどうかで研究者も悩みがあったであろう。それは今に尾を引き、原発反対とか研究炉は問題ないとか表明したくなる精神状況に置かれているように見え、実験所の人達の苦勞が察せられる。しかし、財政的には、他の分野からみるかぎり、恵まれていて本当の金の苦勞を知らずにきた実験所といえる。それが此処にきて実験所の存廃が問われる状況になったときにも、危機感のない甘えた状況をつくりだしているのではないかと気になる。

木村先生のご逝去に接し、当時のご苦勞を想い、敗戦後のゼロからの出発の気持ちで、この難局に立ち上がるのが教えを受けた我々の世代の責務であると考えている。

(京都大学化学研究所教授)

木村毅一先生の思い出 — 原子炉建設本部の頃

高橋 幹二

原子炉建設本部は、当初旧工学研究所内に設置され、その事務所は京都大学本部の東隅の木造平屋建てにありました。昭和35・36年頃のことです。建設本部長の木村毅一先生・副本部長丹羽義次先生以下、事務職員を含めて10数人の所帯でした。当時7人の侍と自称した若手教官は、昼は原子炉設置申請書の原稿づくりに、夜は立地候補地の現地説明会にと多忙な毎日でありました。このうち、柴田・桂山・筒井・東村・岡本・岩田の各氏（いずれも後に原子炉実験所教授）はすでに停年退官され、いまなお現役として本学に残るのは小生のみとなりました。思えば30年余も昔のことです。

当時は、みんな仕事もよくしたと思います。が、なによりも血気盛んな若者達（？）の集まりであり、正副本部長にもよくかみついたものです。そして、そのとりなし役はいうまでもなく本部長の大きなお仕事の一つであったろうと思われます。本部員は、それぞれの専門に応じて一応その役割分担は決まっていたのですが、「他人の縄張りを犯せ」というのが、暗黙の了解事項であり、事務官も含めてお互いによく議論をしました。原子炉のように、幅広くそして精緻な科学技術を結集した総合的プロジェクトの準備が、このような少人数によって成功裡に達成されることになったのは、まさにこのような雰囲気づくりと、また若手の能力を最大限に引き出されることに力を注がれた本部長としての木村先生のおかげであったと思っています。

それにしても、立地選びは大変な仕事でありました。報われぬ作業も多く、ともすれば挫折感に陥ろうとする中で、ねばり強くこれを成功に導かれたのは、多くの関係者のご尽力もさることながら、正・副本部長の軟・硬のコンビネーションが、対外・対内的に大きな役割を果たされたことは察するに難くありません。現地の説明会は夜10時頃から始まることも珍しくありませんでしたが、木村先生のとつとつした中にも、ご自分の経験を踏まえた情熱的なお話は、必ずしも原子炉設置に好意的でない会場の雰囲気の中でも、聴衆の耳を引きつけるものがありました。多分N地区のことであつたと記憶しますが、深夜の会場での先生と聴衆との緊張したやりとりの場面が今でも臉に浮かびます。

先生のもとで私が仕事をさせて戴いた期間はそう長くはなく、せいぜい2年くらいであつたかと思います。研究上のお仕事についても、残念ながら詳しくは存じ上げませんが、しかし、折々に伺った台北時代のお話や広島の原爆調査のお話を通じて、その柔らかな語り調の中から、先生の学問とその社会的責任に対する熱い情熱が伝わってきたのを今でも鮮明に思い出します。

木村先生は、建設本部長としての大役を果たされた後、さらに初代所長として実験所の基礎を築き、大学における原子力研究と共同利用研究所としての発展に力を尽くされ、また、大学人として後輩に残されたものは限りなく大きいものがあります。

（京都大学原子エネルギー研究所教授）

木村毅一先生のご遺徳を偲ぶ

桂山 幸典

中国の経書に「古への明德を明らかにせむと慾する者は先ず国を治む」とあるから、さし当り原子炉実験所を安泰に発展させてからと云うことになるのであろうが、それは差し当り私の任ではない。私が木村毅一先生と共に関西研究用原子炉建設の仕事についたのは、私が京都大学農学部助教授から工学研究所に配置換となり、工学研究所に設けられていた関西研究用原子炉建設本部員を命ぜられた昭和36年8月1日以降である。しかし木村先生が京大原子炉実験所を停年御退官後も、また私が同様停年退官後も共に福井県の顧問として年に数回はお目にかかっていたから、約30年の長いおつき合いということになる。昭和36年当時の関西研究用原子炉建設本部は木村毅一先生（当時理学部教授）を本部長とし、丹羽義次副本部長（当時工学部教授）以下7人の侍（当時7人の侍を自負していた若手は少なくとも8人以上はいたと思う）と数人の助手技官及び3人の若い美女という構成で、応用会計学の権威と自他共にゆるず、故川合弥五郎事務官がすべての事務および関西研究用原子炉建設委員会の事務局を所掌していた。本部員の主たる業務と云えば、関西研究用原子炉を建設完成させることでありそのためには、先ず原子炉設置承認申請書を起草提出しパスさせ、付属設備を含むすべての仕様を決定すること、主な建物（原子炉棟、ホットラボラトリ、トレーサラボラトリ、廃棄物処理棟、研究棟等）を設計し、これ等の経費を文部省に概算要求して、工事業者を選定すること等である。私が赴任したときは原子炉の基本的型式は既に決定され業者も米国

I. N. Cと交渉中で、宇治地区をサイトとして原子炉設置承認申請書は提出済であったが宇治地区設置に対し、大阪市、大阪府、大阪大学も反対しており大阪大学榎田教授らの扇動により宇治の茶業組合も緑茶の放射能汚染を心配して反対し、暗礁に乗り上げた状態となっていた。京都大学としては、外に高槻市阿武山地震観測所周辺及びそれと安威川を挟んで西側の千里丘陵を候補地として調査していたが、大阪市、大阪府水道上流と云うことでは宇治と同じで反対されるのは必至と見られていた。この外誘致して頂いた所として枚方市交野地区、四条畷、河内長野それに熊取町の計4ヶ所については、立地調査と地区の賛成反対両者に対する説明会など多忙な毎日であった。たとえば説明会など京都No.の車では目立っていけないということで、夕方前に建設本部を出発し大阪京橋の阪大工学部に立寄り、早目に夕食を済ませて大阪大学の車を借用して現地に向い、地元の方に夕食後お集まり頂いて話を聞いてもらい（7時～9時ごろ）逆に阪大工学部に立寄って京都に帰るという次第で、家に帰るのは深夜1時2時という毎日であった。木村先生はこのハードなスケジュールに文句も云わずにおつき合い下さったのである。立地が決まらないという焦躁感から、一同細かいことから文句も多く、月に2度ぐらいは丹羽（副本部長）雷がおちるという状態であったが、木村毅一先生は実に、内に対しても外に対しても辛抱強い方で、私など30年の長いおつき合いの中で、木村毅一先生が激怒された姿を見たことがない偉い先生でした。この様に辛抱強く、怒らず、努力

される先生であったからこそ、京都大学物理教室にあったサイクロトロンを戦後進駐軍により持ち去られ海底投棄されたにもかかわらず、京大化研にこれを再建され、関西研究用原子炉と併行して大阪府立放射線中央研究所を開設するという偉業をなしとげられたのだと思う。一方、関西研究用原子炉は地元の根来助次氏らの（当時熊取町々会議員）熱心なご協力もあって、当時の金で1億円という破格の安値で土地も入手し、昭和36年末起工式をとり行うまでになった。その後周辺の風当りを考え柴田俊一教授と相談して名を棄てて実をとる手法が功を奏し、昭和38年4月1日付京都大学原子炉実験所として発足するに至ったのであるが、この間原子炉設置承認申請書の変更、安全審査など目のまわる忙しさであったが安住の地を得た安心感から誰の顔にも笑顔が戻ったのである。原子炉本体も順調に工事が進み各種建屋も昭和39年春には完成し、同年5月原子炉は初臨界に達した。木村先生に皆で相談した後、臨界を記念して碑を建て

たいので何か碑文を書いて下さいとお願いしたところ、数日たってから半紙に清書されたものを持ってこられて大分練習したよと云われたそれは、食堂前庭の角にある記念碑にみられるとおり、「すべてのことは今ここにこめられてあり、今ここは自からある」という高い次元の哲学的内容である。木村毅一先生は折にふれ私たちに、われわれ科学者のやっていることは「亮天功」すなわち天の功を亮けるだけであるという信念を持って当らねばならないと教えられた。碑文と云い「亮天功」と云いいずれも木村毅一先生の信念・理念の一端を窺うことが出来るのではなかろうかと思う。偉大な木村毅一先生は多くの施設を作られた。しかし今、先生なく、また施設も、サイクロトロン、大放研など既になくなった。せめて、熊取の京都大学原子炉実験所だけは永遠に光り輝いてほしいと祈念するとともに木村先生のご冥福を祈るものである。

（京都大学名誉教授

元原子炉実験所放射線管理部門教授）

木村毅一先生との出会い

筒井 天尊

関西研究用原子炉建設本部長として現在の京都大学原子炉実験所の建設の総指揮をされ、原子炉実験所の初代の所長をされた木村毅一先生が本年の7月に亡くなられて、木村毅一先生のいわゆる原子炉建設本部の“7人の侍”の一人として原子炉実験所の創設に関わり、その後、原子炉実験所の所員となり、3年前に停年退官をしたものとしては、研究用原子炉の建設が終わった後、原子炉実験所の所員となられなかったお一人を除いて、侍どもがすべて停年退官あるいは退官したこととあわせて、原子炉実験所の創設から約30年という時の流れを感じさせられました。

職場の長としての木村毅一先生とおつきあいは、昭和36年4月1日から昭和43年4月1日に木村毅一先生が停年で退官されるまでの7年間ということになります。それ以降、少なくとも毎年1回、“旧原子炉建設本部の忘年会”などの会合でお会いしていましたが、昨年の忘年会には体が疲れるということでお見えになりませんでした。その後、とくにお身体が悪いということは聞いていなかったもので、木村毅一先生の訃報には大変驚きました。

木村毅一先生と私との出会いは、私にとって全く予期しなかった形で起こりました。それは、昭和36年4月1日付で、関西研究用原子炉建設本部長に、藤本武助先生に変わって木村毅一先生がなられたということです。

長年難航していた関西研究用原子炉の建設予定地が熊取町の誘致によって本決まりとなり、京都大学が研究用原子炉の建設にとりかかるために関西研究用原子炉建設本部をつくり、藤本武助先生を関西研究用原子炉建設本

部長に予定し、あまり詳しいことは知りませんし、また正確ではないかもしれませんが、私が岩井重久先生から聞かされたところでは工学部が建設についてバックアップし、建築・土木・設備についてそれぞれ責任者をおき、建築については当時営繕課長であった山本和夫先生、土木については工学研究所におられ現原子エネルギー研究所長の高橋幹二先生が予定されている。そうして、設備については私に責任者となるように、またこれを引き受けるかどうか1週間以内に藤本武助先生に返事をしなさいと岩井重久先生から申し渡され、正確には覚えていませんが、これは昭和35年10月であったと思います。そこで、設備についてはなにもわかりませんが、とにかく一生懸命やってみようと、一大決心をして、この新しい任務を引き受けさせて頂くことにし、恐る恐る、震えながら藤本武助先生のお部屋に参上し、お引き受けしますと申し上げました。昭和35年12月に関西研究用原子炉建設本部が旧工学部事務室の2階にあった小会議室に置かれ、昭和36年2月1日付で、私は工学研究所助教授という形で、関西研究用原子炉建設本部員になりました。

ところが、降ってわいたような関西研究用原子炉建設本部長の交替で、藤本武助先生のもとで新しい仕事をさせて頂こうと覚悟を決めていた私にとっては大変なショックでした。

その後、正確には覚えていませんが、昭和36年の6月頃かと思いますが、関西研究用原子炉建設本部も組織がえし、所員予定者の公募があり、私も所員予定者の一人となり、ここに木村毅一先生のいわゆる原子炉建設本

部の“7人の侍”がそろいました。柴田俊一先生、桂山幸典先生、東村武信先生、岩田志郎先生、岡本朴先生、高橋幹二先生と私の7人です。しかし、私としては自分の面子にかけて、従来からの原子炉建設本部員としての自分の仕事である設備関係全般の仕事を完全になしとげることと、自分の専門である放射性廃物処理関係の設備を立派に完成させるということだけが念頭にありました。そうして、木村毅一先生をお助けしなければならないという義務感はありませんでしたし、とくに原子炉建設本部長としての木村毅一先生をもち立ててという気はなかったことは確かでした。しかし、木村毅一先生は私への思いやりをして下さったものと思いますが、ご自分の研究室の福井進技官（現原子炉実験所員）を私の手助けに配置されました。そうして、福井進技官は私の設備関係の仕事全般、放射性廃物処理設備の工事の現場での施工の監督・検査を熱心に手伝ってくれまして、私はこのことを非常に感謝しています。

木村毅一先生のお人柄については、私のようなものが述べさせて頂くのはなんとなくおこがましい気はしますが、私なりに感じていたことを述べさせて頂きます。

原子炉実験所が創設されて、所長としての木村毅一先生のもとで所員としての色々の仕事をし、木村毅一先生との関わりが多くなるにつれて、だんだん木村毅一先生のお人柄に引き付けられるようになりました。

木村毅一先生のお人柄をどのように言い表わせればよいのか、うまく言えませんが、一言でいえば、先生独自の哲学と信念とをお持ちになっていて、それが人を引き付けるものであったといえると思います。

また、率直に言いますと、“役者が何枚も上”で、意見が合わなくて、相当ひどく噛み付いても全く歯が立たなかったということで

す。私の意見を完全に受け入れて頂けたことはそれほど多くはありませんが、時と場合によっては、私が相当ひどいことを申しあげても決して立腹されず、最後まで私の言いたいことを聞いて下さいました。また先生のご希望に対して私が反対の意見を申し上げた時には、懇切丁寧にご自分の希望を話され、ご自分の希望を受け入れてくれるようにと、極めて丁寧に私に頼られました。

原子炉実験所の本格的な運営が昭和39年6月の研究用原子炉（KUR）の完成とともに始まり、所内として運営についての色々のことを決定する組織として所内運営委員会が設けられましたが、午後1時頃から所内運営委員会が始まって、議論百出でなかなか意見がまとまらず、いわゆる“暁に祈る”ように、夜が明けるまで議論したことが何回かありましたが、木村毅一先生はずっとつき合われ、皆の意見がまとまるまでじっとお待ちになりました。そうして皆の意見を無視してご自分の考えを強行されたことは一度もありませんでした。また、所員各層の意見を反映させる場として、この方法が本当に良いかどうかは意見の別れるところと思いますが、所内運営委員会にかかわって、現在の所員会議を作ることについて、所員各層の意見を聞いて積極的に取り組まれ、これに反対の立場をとっていた私に、懇切丁寧にご自分の考えを説明され、賛同して欲しいと頼られました。こうした所長としての木村毅一先生の運営方針は常に“和”を尊ばれたものと思います。

さきに書きましたように木村毅一先生と私の最初の出会いは、私にとって全く予期しない形ではありましたが、このような素晴らしい木村毅一先生に出会えたことは、私のこれまでの人生にとって本当によかったと思っています。（京都大学名誉教授・元原子炉実験所放射性廃棄物処理設備部門教授）

木村毅一先生の思い出

岩田 志郎

私が木村先生を初めて拝見したのは昭和33年2月頃、先生が関西研究炉の準備委員として枚方地区の地元説明会で、阪大の樋田教授の辛辣な質問の矢面に立ち、苦慮しておられたお姿であった。当時私は阪大理学部の大大学院学生であったが、35年4月に京大工学研究所に助手として採用された。同年の暮のある日、木村先生と丹羽先生が研究室に訪ねてこられ、昨日の建設委員会で君を将来の研究用原子炉の所員候補者に推薦し、開所まで建設本部員として建設計画に参画してもらうことに決定したが協力してもらえらるうかと尋ねられた。私は既に数か月前から建設委員会のホットラボ専門委員会の書記として、建設計画の策定のお手伝いをしていたので、建設本部員になることには異論は無かったが、将来の所員候補者の話は初耳であったので少し当惑した。それで、私のような者でもお役に立つのでしたら承知しますとお答えしたところ、それでは明日から建設本部の方に詰めるように言われた。翌日建設本部で木村本部長、丹羽副本部長の下に、柴田、岡本、桂山、東村、筒井、高橋の諸氏と顔をあわせ、所謂七人の侍の活動が始まった。木村、丹羽の両先生は地元接衝にお忙しく、建設本部には毎週1回開かれる本部員会議に出席されるだけであったが、当時の重要問題として、原子炉容器の材料と、原子炉遮蔽体の材料の選択が原子炉専門委員会からの懸案問題として残された。原子炉タンクの材料として強度の高いステンレス鋼を用い、ビームチューブには中性子吸収断面積の小さいアルミニウムを使うことが物理系の建設委員の希望であり、これ

に対して異種金属の接合による腐食の進行を危惧するのが化学系委員の意見であって、なかなか纏らなかったようである。そこで私がアルミの耐食性につき調査することになり、種々の文献を調べたところ、アルミの純度が高ければ、純水中の腐食の進行はそれ程速くなく、特に強放射線下の水中では水の放射線分解に伴う酸素ラジカルの作用で、アルミの表面に強固な酸化被膜が形成され耐食性が増すことがわかり、これを本部員会議で報告したところ、いつも黙って会議の意見を聴いておられるだけだった木村先生が一言、「それでは原子炉容器の材料は全部アルミにしましょう」と言われ、この鶴の一声で問題は解決してしまった。その後、KURの建設中に、ステンレスタンクーアルミビームチューブで造られたローマ大学の原子炉が、運転開始後1年もたたないうちに漏水が起きたという情報が入り、先生の判定の正しかったことに胸を撫でたのを思い出す。もう一つの問題である遮蔽材のことについては、当時ほとんどの研究炉で使われている鉄鉱石の中にはコバルトが少し含まれており、岡本氏の計算によると、これが長年の中性子被曝で放射化されて、炉室内の放射線レベルが高くなる恐れがあるので他の材料、例えば重晶石（硫酸バリウムの鉱石）にした方がよいということになった。その頃、米ソの空中核爆発実験が盛んに行われ、毎日のように放射能降雨が新聞を賑わしていたが、私が学会で上京した際、知りあいの家で放射能降雨について話をしていたところ、たまたま同席していた人が突然まっ青になって、「放射能でそんなに怖いのですか。

実は父が薬罐に石を入れて、これには放射能があり、炊き出して飲むと頭がよくなると毎日飲まされています。すぐに父を連れてきますので話をして欲しい」と飛んで帰られ、やがて親爺さんがやってきて、「実はその石は北投石といって、台湾の北投温泉というラジウム温泉のものであるが、戦前に貸金のかたに取得したものを、東京都内でラジウム温泉を開業した時に使い、大変儲けさせてもらったが、本当に放射能があるかどうかかわからないので、何だったら調べて欲しい」と言われ、石を幾つか預って帰って、その話を建設本部員会議でしたところ、木村先生が突然目を輝かされ、「とても懐しいことを思い出させてもらった。その北投石は重晶石であって、自分が台北帝大に勤めていた頃、ウランを抽出して実験に使うためよく北投温泉に出かけ採集したものだ」と言われた。そうなることは大問題で、もし重晶石に多量のウランが含まれておれば原子炉の遮蔽材には使えないわけで、早速預ってきた石を分析したが、放射

能は含まれていないことがわかった。しかし、念のために、その頃バリウム製造のために市販されていた重晶石（これが後にKURの遮蔽材として使われた）の中のウランと、併わせて希土類元素（中性子捕獲断面積が大きく、捕獲ガンマ線源になる恐れがある）の含有量を、当時本邦で唯一稼働していた原研1号炉で放射化分析をして調べた結果、ほとんど問題になるような量ではなかったので安心した。

その後木村先生が所長として原子炉実験所にご在勤中、奥さんとご一緒に官舎に住まれ、私どもの家族も近くに住んでいた関係で、よく子供達を可愛がって頂いたので、先生がご停年退職された後も京都のお宅に家族で年に1～2度おうかがいしたが、そのつど先生は「岩田さん、一度一緒に北投温泉に行きましょう」とおっしゃって下さったにもかかわらず、先生のご存命中ついに果すことができなかったのはまことに残念でならない。

心よりご冥福をお祈りします。

（京都大学名誉教授

元原子炉実験所ホットラボ設備部門教授）

木村先生を悼む

東村 武信

私は木村先生はまだまだ長生きなさることと想っていた。昨年春が終る頃、八瀬の病院へお訪ねした時も、肺気腫と言っておられて、すこし息苦しそうなお感じもあったが、別に臥しておられる譯でもなく、病院と言っても医者付きの保養所といった風のいかにも清潔なところで、放射線科の前任（あるいは前々任か）の福田正先生も入っておられて、お二人で元気に話されていた。何しろ木村先生の母御は九十五才までお達者になさっていて、私の村では長い間、長命の記録を保ってられた方であったので、何とはなしに木村先生もまだまだお若いという感じがしていた。

昭和のごく初期に物理を卒業された頃は、ひどい不景気の時代であったらしい。不景気の時代ほど学者が多くなるといった法則の通り、木村先生の同級あるいはその前級には有名な学者が多く現れている。私の師の四手井綱彦先生は一年先輩であったし、同級には湯川、朝永の二人の先生や、科学史の薮内先生、解析学の小堀先生、それに東京工大に居られた熱学の大石先生など、日本の物理を育てた諸先生が輩出した時代であった。木村先生もその頃の光学研究室であった木村研究室を卒業され、職を待ちながら研究を続けておられた時、北大と台北大学とに席ができて、どちらへ行くかと尋ねられた時、同じく席を待っておられた四手井先生が“スキーができるから北海道へ”と言われたので木村先生は“それなら私は暖い方がよいから”と台北へと決められたとのことであった。台北には荒勝先生が居られて、以後、コックロフト型の加速器を作られて中性子の質量を測定するなど、

当時の物理の最先端の仕事に十年余を過ごされた。

荒勝先生は向う意気の強い方であって、それに対して木村先生はあまり自我を主張なさらない纏め役として適切な方であったので、台北大での仕事は順調に進んだらしい。その中に戦争が始まり、研究の方向も自由が少なくなってきた頃、荒勝教授は京大へ招かれて木村先生も一緒に京大へ帰って来られた。京大での荒勝研はかなり大きな研究室になり、卒業生もどんどんと巣立って行って、研究室にもサイクロトロンを作る準備が進んできたが、敗戦。そうして米軍がサイクロトロンの材料を接収して捨ててしまった。その頃、私は高校生で、物理の中でも最も物理らしい原子核物理をやろうという望みを抱いていたがサイクロトロンが無くなったりする世の中で原子核物理がやれるだろうかという不安を持っていた。併し木村先生は物事にあまり悲観的にならない方であって、その頃から既に“また何時か作れるようになるよ”と楽しく夢を語られていた。

この、先生の楽観的な気質というものが、ある場合には先生をとんでもない場所へ引きずり込んだのかもしれない。その最たるものが原子炉実験所の初代所長という役割であった。宇治へ、高槻へと、何処へ行くかと心配されていた頃、京大原子炉を作るための組織が段々に確立してきて、責任者を決めねばならなくなった頃、木村先生の名が挙げられて、“湯川君まで言うんだから仕方がないかなあ”と言って、渋々引受けられたのが初代の所長であった。サイクロトロンが漸く完成し、そ

れを使つての仕事がそろそろ軌道に乗つてきたかといったその時期に、化学から生物学までといった頗る広い分野の人々のために、物理学者としてはサービスと言うより他はない仕事の責任者を引受けざるを得ないようになってしまった木村先生の当時の御心境は複雑なものであらうと想われる。

木村先生は思想的にはむしろ保守的な傾向の方であつた。併し、自由な時代であつたと思われる大正時代に育つた人々の特質とも言えるところの、自分の考えを他人に性急に押付けることは努めて避けるといった特質を保つ

ておられた。そうして、若い者は少々破目を外してもそれは若いせいで、いづれ判つてくると静かに見ておられるというところがあつた。あまりにも自分の方針を出されないので会議に時間ばかりかかつて、列席していて嫌になってしまうことも時折りあつた。併し原子炉実験所のような極めて多くの違分野の人々の集まりであつたところで、とに角は一つの方向が出てきたのはこの木村先生のやり方の一つの成果であつたのだらう。

(京都大学名誉教授

元原子炉実験所放射線物性研究部門教授)

木村先生を偲ぶ

岡野 事行

木村先生の思い出と言へば、私が大学院に入った頃の、京大物理教室での簡素な黒い背広を召された小柄なお姿が、今も不思議と印象強く先ず頭に浮かんで参ります。当時先生は、蹴上のサイクロトロンが一応完成はしたものの必ずしも順調ではなく、いろいろと苦勞しておられた所へ、研究用原子炉の話も具体化されて来て、本当にお忙しい毎日のようでした。先生は、昭和30年度に安定同位体分離のための科研費を得られ、装置を日立製作所に発注しておられましたので、私にチームに加わるよう言われました。設計については、武藤二郎先生を初めとする木村研究室のスタッフが総掛かりでご協力申し上げていましたが、私はただ建設のお手伝いと分離の実験をする程度でした。私が一人で装置を運轉

してデータをとっていますと、物理教室へは姿を見せられることの少なかった木村先生が入つて来られて、イオン源やコレクターでの問題を解決するのに、どの文献にも述べられていない独創的なご提案をあれこれとされて出て行かれるということがよくありました。先生のお話は相当な費用や工作を要するものでしたので、当時の私としてはいつもただお話を承ることに終わっていたようで、今から思へば本当に勿体なく、申し訳無いことでした。その後、M1に入れられた福永清二さん(現山形大教授)や高松邦夫さん(現高エネ研教授)のご協力を得てテストを続け、イオン源を改良してビーム強度は飛躍的に増大しました。私は、博士課程に進んでからは、分離された同位体を使つての陽子捕獲反応の実

験を武藤先生と共に始めましたので、同位体分離装置は休んでいることが多く、又木村先生も原子炉問題や加えて大放研の創設といったお仕事で益々忙しくなられたため、物理教室ではめったにお目にかかれない状態となっていました。猶、この電磁同位体分離装置は、昭和50年頃物理教室としては不要ということになり、建設スタッフの一員であった化研の竹腰秀邦教授（現広島電機大教授）が大部分を蹴上へ移設されました。その折り、熊取に貰ってきた高圧絶縁柱の一本が、今もKUR-ISOLで使用されております。

原子炉実験所へ参りましてからは、木村先生は、私の直接の上司である林先生に遠慮されてか、殆どご教示をお与え下さることもなく、むしろ雲の上の人といった感じでした。今も思い出しますのは、入所間もない頃の所内運営委員会で、話の筋道は忘れましたが、「二階へ上げておいて梯子をはずされては困る」と立腹され、会議が一瞬シーンとなって

しまったことがありました。いつも温厚に見受けられた先生だけに、創立間もない所の運営に苦勞しておられる様を拝見し、涙の出る思いでした。しかしこの件は、間もなく先生のご意向に沿って解決されたようでした。

二年程前にご自宅でお目にかかり、原子炉実験所の近況等についてお話をしておりました折り、「時代が変わったからな」とつぶやかれ、私は原子炉実験所も時代に即応して早く新しい方向へ再出発すべきだと思っておられると感じました。多くの人々がすべてをこめた実験所が、おのずから新しい道を切り開いて行くことを、先生は当然期待されたに違いありません。先生のこのご遺志に沿って、さらに高度な研究の場として新しく生まれ変わった実験所を実現することこそ、我々残された者の先生のご苦勞に報いる唯一の道だと信じる次第です。

最後に、先生のご遺徳とご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（計測装置研究部門 教授）

編 集 後 記

木村先生が亡くなられたと聞いたとき、先生の御年齢から、何時かはこの日が来るであろうと、ある程度の覚悟はしていたものの、いままでの心の支えが一挙に崩れた思いで、その晩はウイスキーを、明け方近くまで一人で飲み続け、生前の木村先生の一語一語を思い浮かべ、嘯みしめて、涙しました。思えば、昭和38年から、木村毅一教授の担当なさる原子炉設備部門（通称第二部門）の助教授として着任して以来、先生から見ればはなはだ頼り無い助教授であって申し訳無く思っておりますが、兄貴分の岡本助教授（現名誉教授）としょっちゅう兄弟喧嘩しながらも、力を合わせて、先生の教えだけは、しっかりと守って、第二部門を先生の想いのこもった素晴らしい部門に育てる事ばかりを考えて来ました。

木村先生は「天の時は地の利にしかず。地の利は人の和にしかず。」と墨痕鮮やかにしたためられて、私どもに下さり、「人の和の大切さ」を教えて下さいました。30年後の今日、曲がり角に来た原子炉実験所にとって、忘れられかけた「人の和の大切さ」を先生のご逝去は、一番大切な事を更めて思い起こすきっかけとなったように思います。

この度、先生のご逝去に際して、“原子炉実験所だより”に追悼特集号を出す計画が、原子炉実験所だより編集委員会で発議され、その際、木村先生の担当しておられた部門の後継者として、また実験所開設当初からの数少ない所員として、私が編集委員会の相談役をお引受けした次第です。主だった先生方をお願い致しましたところ、皆様公私ともにお忙しいなかで、それぞれの心の籠もった追悼文を御寄稿頂きました。私ごときが何一つ、付け加える必要もない追悼文ばかりです。これもひとえに、亡き先生の御人徳の賜物と深く感動するとともに、御寄稿頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。尚、所謂7人の侍の一人である柴田俊一先生は、別途原子力学会誌に木村先生の追悼文を掲載されており、重複するからと御遠慮なさいました。只、何としても残念なのは、木村先生の御葬儀の時、お元気でいられて、この企画についてご相談させていただいた、林竹男先生が、その直後に木村先生の後を追うようにして、お亡くなりになり、林先生の御寄稿を頂けなかった事です。ここに木村先生と共に林先生の御冥福をあわせてお祈りして、編集後記と致します。 合 掌。

原子炉設備関係研究部門 教授 渋谷 巖